

京都大学教育研究振興財団助成事業
成果報告書

平成28年12月7日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団

会長 辻 井 昭 雄 様

所属部局 工学研究科 合成・生物化学専攻

職 名 教授

氏 名 跡 見 晴 幸

助成の種類	平成28年度 ・ 国際会議開催助成		
国際会議名	第11回国際極限環境生物学会 (11th International Congress on Extremophiles)		
開催期間	平成28年9月12日 ~ 平成28年9月16日		
開催場所	京都大学 百周年時計台記念館		
参加者	総数 399名	内訳 正参加者・学生 海外 180名、国内 189名 同伴者 海外 25名、国内 5名	
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input type="checkbox"/> 無 <input checked="" type="checkbox"/> 有(プログラム)		
会計報告	事業に要した経費総額	24,959,105 円	
	うち当財団からの助成額	1,000,000 円	
	その他の資金の出所	参加者会費 16,929,065円、エクスクーション費 790,500円、広告掲載・セミナー開催費 1,166,400円、助成金 4,970,000円、寄附金 103,140円	
	経費の内訳と助成金の使途について		
	費 目	金 額 (円)	財団助成充当額 (円)
	会場費	3,930,179	
	レセプション・懇親会・昼食	7,005,890	
	海外・国内招待者宿泊費/シャトルバス	2,225,123	
	印刷製本費	1,821,973	1,000,000
	通信運搬費/消耗品費	1,538,674	
事務局経費(人件費・カード決済手数料等)	5,734,871		
論文集購入・配布/第12回国際極限環境生物学会への学生参加支援基金	2,702,395		
合 計	24,959,105	1,000,000	
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) この度は採択いただきまして、感謝申し上げます。貴財団は説明会の時にもお話がありましたように、採択後の手続きや報告書の提出などが、実質的な作業に集約されており、大変好感をもちました。今後も京都大学の名前を冠する財団としての、京都大学ならではの多様な研究に対して、引き続き御支援を頂ければ誠に有難く存じます。		

平成 28 年 12 月 7 日

第 11 回国際極限環境生物学会 成果の概要

- (大会・学会名称) : 第 11 回国際極限環境生物学会(Extremophiles2016)
(開催日時) : 平成 28 年 9 月 12 日～ 16 日 (5 日間)
(開催場所) : 京都大学 百周年時計台記念館
(京都市左京区吉田本町)
(参加人数) : 369 人 (うち海外からの参加者数 180 人、国内 189 人)
他に、同伴者 30 人 (海外 25 人、国内 5 人)
(大会概要・トピックス) :

第 11 回国際極限環境生物学会(英語名:11th International Congress on Extremophiles, 略称:Extremophils2016)は、平成 28 年 9 月 12 日(月)～16 日(金)の 5 日間、京都大学百周年時計台記念館(京都市左京区)にて開催された。

今学会を総括すると、特別講演(6 講演)、基調講演(38 講演)、一般口頭発表(41 講演)、ポスター発表(222 演題)、ランチョンセミナー(1 講演)、合計 308 題の発表があり、世界各国における最新の研究成果が報告され、会場の至る所で盛んな討論が繰り広げられた。

海外からの参加者は、28 ヶ国から 180 名を数え、これに国内参加者 189 名を加えて、参加者の合計は 369 名であった(他に、同伴者 30 名)。海外からの参加者が国内参加者とほぼ同数であったことから、日本開催でありながらも国際色の強い学会となった。国別では、近隣国である韓国(27 名)と中国(24 名)からの参加者が多いのは予想通りであったが、前回の開催国であるロシアからの参加者(20 名)がそれに続く規模であったことは特徴的であった。また欧州から 81 名、北米からも 27 名の参加を頂いた。さらにアイスランド、ポーランド、ケニア、クエート、パキスタン、南アフリカ、トルコ、台湾、オーストラリア、ニュージーランド、チリなど世界各地からの参加者が見られ、国際会議に相応しい参加者構成であった。

本大会の交流イベントとして、会議第 1 日目には Welcome Reception、第 3 日目には Excursion、第 4 日目には Banquet を催行し、国内外の多くの参加者と同伴者が参加した。今回は開催地が京都であったため、Excursion では世界遺産を含む京都市内の仏閣(清水寺、金閣寺、三十三間堂、広隆寺)を訪ね、これらの歴史的建造物や所蔵する国宝級の仏像などの見学を行った。また、Banquet では鏡割り、舞妓・芸妓さんによる京舞や、生け花(未生流)の実演を行った。これらの日本の歴史や文化を体験する機会を通じて、日本という国への関心を深める絶好の機会が提供できたと考えている。

トピックス・感想など

本大会は極限環境生物に関する集まりであったが、その研究分野は基礎生物学から産業応用分野まで、非常に幅広いものであった。以下に、本大会において研究発表が行われた、主要な分野を示す。

- 1) Ecology, Diversity and Evolution, 2) Extremophily, 3) Astrobiology, 4) DNA Replication and Repair, 5) Transcription and RNA, 6) Translation and Protein Modification, 7) Cell Membrane and Cell Surface, 8) Physiology and Metabolism, 9) Omics, 10) Viruses and CRISPR, 11)

Extremozymes and Application

また当該分野における世界的に著名な研究者である、以下の6名が特別講演を行った。

Karl O. Stetter (University of Regensburg, Germany) “Cultivation of Unexpected and
"Unculturable" Extremophiles - Facts and Ideas”

Tadayuki Imanaka (Ritsumeikan University, Japan) “Analysis and Application of
Hyperthermophiles”

Patrick Forterre (Institut Pasteur, France) “Hyperthermophiles and the Universal Tree of Life”

Dieter Söll (Yale University, USA) “Universal Concepts Learned from Archaeal Translation”

Tairo Oshima (Kyowa-kako Co., Japan) “Polyamines in Extreme Thermophiles and
Hyperthermophiles and Their Roles in Life at High Temperatures”

Eugene V. Koonin (National Institutes of Health, USA) “Evolutionary Genomics of Archaea and a
General Theory of Microbial Evolution”

さらに今回の大会では、本大会の創始者の一人であり本年3月に逝去された故掘越弘毅先生（東京工業大学名誉教授）の追悼シンポジウムを開催した。本シンポジウムでは、掘越先生が先駆的な研究を行った研究分野（好アルカリ性菌、海洋性微生物、好塩菌など）の将来を見通すことを主な目的として、以下の3名による追悼講演（基調講演に該当）が行われた。

Antonio Ventosa (University of Sevilla, Spain)

Frank Robb (Institute of Marine and Environmental Technology, USA)

Masahiro Ito (Toyo University, Japan)

本大会が終了して約1ヶ月となるが、嬉しいことに国内外の参加者より「大変素晴らしい大会であった」との声を頂いている。運営に携わって頂いた先生方や学生達、さらには企業やその他の組織の方々など、数多くの方々の御支援と御尽力により、無事に大会を開催することができた。主催者を代表して、その全ての方々に感謝の意を表します。本会議の開催が国内外の極限環境生物研究の発展の一助となったとすれば、主催者としてこれに勝る喜びは無いと考えます。

最後になりましたが、公益財団法人京都大学教育研究振興財団におかれましては、本大会の開催にあたり、多大なるご支援を賜りましたこと、厚く御礼を申し上げます。